

〔資料〕

ラグジュアリの意味生成

—茶会におけるもてなしを手がかりに—

木村純子 / 田中 洋

目次

【問題意識と資料の紹介】

1. 研究の目的と背景
2. 研究対象の設定
3. 方法
4. 主な発見物

【資料】

茶席におけるラグジュアリ

1. 研究の目的と背景

この研究の目的は、日本の茶道のなかにみられるもてなし行動を通じて、贅沢感情がどのように生成するか、贅沢感情の生成メカニズムを探ることにある。我々の今回の主要なリサーチ・クエスチョンは、「なぜ茶会の参加者は贅沢を感じるのか」である。

我々はこれまで著者たちは、ラグジュア리를さまざまな観点からビデオグラフィック手法によって分析してきた。ここでの我々の中心的なリサーチ・クエスチョンは、「ラグジュアリとは消費者にとって何か?(What does luxury mean to consumers?)」というものであった。このクエスチョンに沿って、日本と米国での「普通の人々」へのインタビュー、および日本と中国での富裕層へのインタビューを行ってきた。この結果、ラグジュアリがどのような意味構造をしているかを捉えることができた。これまでに我々がこれまでに焦点を当てたのは個人的に感じられる贅沢感であった。

しかし、我々はこれまでの方法では不十分ではないかと思えてきた。贅沢は個人的に感じるものであるだけでなく、主人—客というもてなしのコンテクストにおいて重要なエレメント

となっている。私たちが今日典型的に贅沢と感じる場所は、その多くが高級なホテルであったり、あるいは豊かな生活を送っている友人宅に招かれたときである。

今回は、もてなしとしての贅沢に焦点を当てることにした。その理由は以下のとおりである。

- 1) 歴史的にも、ラグジュアリは多く誰かをもてなす目的で実行されてきた。例えば、ベルサイユ宮殿はルイ14世が愛人をもてなすために国の予算の3分の1を注ぎ込んだ。
- 2) 日本でも、京都にある桂離宮は日本の典型的な王朝文化の所産として知られている。この建物も17世紀に当時日本貴族文化の中心人物であった後水尾上皇をもてなすために、整備された歴史を持つ。
- 3) 現代の我々が日常贅沢を必要とするのは、お客様を意識するときである。お客様をよりよくもてなすためには贅沢なしつらえを準備することはよくある。

2. 研究対象の設定

そこで、今回は日本の茶の湯を対象として、ビデオグラフィックを行うことにした。なぜ日本の茶道を研究対象としたのか。

茶道とは、客人をお茶によってもてなす儀式のことである。お茶が発明されたのは中国で、日本には早い時期から伝わっていた。お茶は当時楽しみであるだけでなく、医学的な効果をもった神秘的なパワーのある飲料として考えられていた。

お茶を飲む作法を儀式化して、芸術の領域に高めたのはおよそ500年前の茶道家、千利休(せんのりきゅう)である。お茶は16世紀以降、武

士の間で武士のたしなみとして普及した。戦にあけてくれている武士が、ひとときの余裕をもつために、お茶を立ててもらい、お茶を飲んだのである。利休は庶民の間でも行われてきたお茶の作法をも取り入れた。お茶を飲むことは権威や社会的ステータスに関係なく行われる儀式であり、万人のための質素で禁欲的な作法にしたのである。

現在の日本では茶の湯は、多く女性の趣味ごととして考えられている。茶の湯は習って身につけるべきお稽古ごとであり、複雑な約束ごとがある。茶の湯を習うことはオカネのかかる趣味であるが、たしなみのある日本女性になるための修行として考えられている。つまり、茶の湯の趣味を行うことは、実用性よりも、女性の教育として有用であり、かつ学ぶべき教養の一部と考えられてきた。

この意味で、茶道は実用的な消費者行為ではなくて、非日常的に行われる儀式であり、贅沢である。そこにはもてなしという行為が基底にあり、贅沢を感じさせるための仕組みがあるのではないかと考えられた。お茶を分析することで、ラグジュアリの意味をこれまでとは別の視点で捉えることが可能ではないかと思われたのである。

3. 方法

今回、お茶会のセッションを三人の女性に行ってもらい、ビデオにその茶会の様子を撮影した後でインタビューを行った。

今回の茶会の一回のセッションは約20分間。茶会ではホスト役の女性がひとりおり、二名の客人のうち、ひとりが正客となり、もうひとりは相客（正客に伴う客）となった。茶会で重要な役割を果たすのは亭主と正客である。このふたりの間でさまざまなインタラクションが繰り上げられる。

茶会は、お茶でもてなす行為を儀式化したものである。そこには複雑な手順や約束事があり、正式の茶会に参加するためには、こうした手順をあらかじめ勉強しておく必要がある。例えば、お茶が注がれた茶碗をどのように持つか、どの

ように飲むか、また飲んだ後にどのように振舞うべきかが細かく決められている。

茶会は静かな茶室で行われ、非日常的な空間において行われる。かつて茶会は中世の日本においてはふだん戦争にあけくれるサムライの趣味であった。茶室は忙しい殺伐とした日常から逃れて静かな時間を過ごすことのできる貴重な機会なのである。

- ・主人に導かれて客人は茶室に招き入れられる。



写真1 席入り前に蹲で手を清める

- ・挨拶を交わしたのち、菓子が供される。
- ・主人によってお茶が出され客はそれを味わう。
- ・お茶を飲んだ後で、茶道具を拝見して客はそれらを味わう。

19世紀の日本の哲学者、岡倉天心（1964）は茶道について *The Book of Tea* (茶の本) の中で以下のように述べている。

“Teaism is a cult (ceremony) founded on the adoration of the beautiful among the sordid facts of everyday existence.”

茶道は、道教の宗教にルーツを持つものの、宗教的な行為ではない。また純粋に美的な行為でもない。また単なる日常行為でもない。お茶を出すという日常的行動を高度に儀式化したものである。

注意すべきことは、今回の茶会は、主人が客をふたり招いたという形式で行われたもののだが、亭主はお茶の先生であり、茶道を教える立場にある。客人のふたりはその亭主にお茶を習う生徒の立場であるということだ。ただ今回

の生徒ふたりは長い間お茶を練習しているので、茶道にかなりな程度通じた人たちであると言える。

4. 主な発見

今回のインタビューを通じて明らかになったことは、茶会という機会に亭主と客との間にさまざまなインタラクションが存在することである。こうしたインタラクションは次の3つのキーワードで表すことができる。1. チームワーク、2. テーマ性、3. ゲームである。

(1) チームワーク

インタビューのなかでもっとも頻繁に観察されたのは、主人と客との役割期待であった。主人と客とはあらかじめ決められたルールに従って、自分の役割を演じる。茶会は一見すると静かな儀式であるが、それぞれの役割が暗黙のうちに決められており、それぞれは相手のことを思いやることを期待されている。

(2) テーマ性

2つ目の発見物として、茶会のテーマ性が挙げられる。茶会には毎回何らかのテーマが決められている。亭主はそれぞれの茶会のテーマを自分で決める。テーマは季節に合わせて決められるものもあれば、茶会の目的に合わせて決められるものもある。

決められたテーマに沿って菓子の内容や、掛け軸の種類、生けられる花の種類などが決まってくる。こうしたテーマは explicit なものもあれば、implicit なものもある。

(3) ゲーム

茶会で興味深いことは、亭主は客につねに何かおどろきをもたらすような工夫をしていることである。客のひとりには、毎回茶道のお稽古のなかで、毎回必ず「はっとする」ことがあると述べている。

【資料】

日時 2010年1月15日(金)

インフォーマント

東宮先生、久美さん、純子さん

インタビュー

田中洋、木村純子



写真2 お茶席の様子

東宮 例えば、同じ季節に同じお茶会をするとなると、ちょっと工夫して変えるという。基本的なものは同じでも、ちょっと変えるとか。その辺はあれで、全く同じだと面白くないというのもありまして、お菓子を替えるとか、お茶碗を替えてみるということもしますし、それが楽しみでもあります。私は、取り合わせの楽しみというか、亭主の喜びというか楽しみというか。私も、今日は何のお道具を使おうとか、結構楽しませていただきます。何にしようかとか、それがあある意味では楽しみです。

それと、お客さまもある程度分かってくさっていると、今ご覧になっていたと思いますが、正客になった人が会話をしますよね。そのときに、亭主がいろいろ考えてやっけていても、それが全然ピンとこない人だと面白くないですね。だから、亭主とお客さまで一座建立というのですが、うまくお客さまの方で盛り上げていただかないと、亭主が一生懸命しても一人舞台なのです。一人相撲なのです。例えばお能と歌舞伎とか『源氏物語』というものをテーマにすることもあるのです。

田中 そうなのですか。

東宮 そうすると、難しいのですが、例えばお能の取り合わせでやっけていても、正客が全然それを分からなかったら面白くないです。だから、正客になる人は、ある意味では責任があるというか。

田中 なるほど。

東宮 正客が上手だと面白いですよ。

田中 そうすると、何かあるお能の出し物をテーマにして、お道具であるとかこういう。

東宮 例えばお茶杓の銘とか、するわけですよ。例えば、「紅葉狩り」なんていうお能があるとしますと、あれは前シテのお姫さまが鬼に変わるわけです。そうすると、鬼のものを出してみたり、紅葉を出したり。あるいは舞台が戸隠だからお菓子は戸隠から取り寄せたりとか、そのようにしてどこかに出すのです。例えば、「桃太郎」のお話をテーマにするとします。そうすると、きび団子をお菓子にしたり、茶杓は日本一にしたり、どこかで犬とかサルとかキジを出したり、いろいろな。例えば蓋置にしても、例えば鳥の形の蓋置とか、お茶碗の模様が何とかとかいろいろなところを出せるのです。そのようにして取り合わせの楽しみというのをやるのですが、あまりやりすぎると今度は品がなくなってしまうので、そこそこなのです。特に薄茶はそういう遊びは。お濃茶の場合はあまり遊びませんけれども。濃茶は一応厳粛にやるので。薄でそうやって遊ぶというか。

田中 薄茶の方がカジュアルな感じですね。

東宮 そうなのです。

木村 取り上げるテーマというのは、現代的でもいいのですか。

東宮 はい、もちろん。

木村 昔話ではなくても、最近でも。

東宮 構いません。亭主の感性で好きなものにしていいのです。

そういうこともあるということで、別にそういうのがいつもあるということではなくて、ただの季節だけの取り合わせも多いし、本当にピンからキリまでいろいろですね。

田中 そうすると、お茶会を催されるときは、「今日のテーマはこれです」というのが、もちろん分かっている場合もあるのでしょうか。

東宮 送別会のお茶とか追善のお茶というのはもうテーマは初めから分かっていますが、そのほかのは開けてびっくり、お客さまの楽しみなのです。だから、いろいろな道具が出てきてお茶が点ってお菓子を食べていくうちに「今日のテーマは何だろう」と想像するというのがお

客さまの楽しみというものもあるのです。そういつもいつもそんなに物語ができるわけでもないのですけれども。

田中 なるほどね。そういうときのテーマというのは、日本語でいうと、何か呼び方というのはありますか。

東宮 趣向とか取り合わせとか。

田中 趣向ですか。なるほど。

東宮 とか、取り合わせとか。

田中 そうすると、あれですよ。お客さまの方がお茶席に出ているうちに、だんだんそういう。「今日のテーマはこれだったのだ」と気付いたりすることもあるという。

東宮 そうですね。分かった、また面白いと思います。ですね。

田中 なるほど。

東宮 いろいろなお茶会があるので、必ずしもそういう。よく春は「娘道成寺」なんていうのがありますね。

田中 そうですか。

東宮 そうすると、桜のとき、釣鐘の形をしたお釜を使ってみたりとか、そういう遊んだりもするのです。でも、いつもいつもそういう取り合わせがあるということでもないのですが。気軽にお茶を楽しんで。

田中 やはりお茶の面白みというのは、そういう主人と亭主と客との。

東宮 そうですね。そういうのがあるから面白いのだと思うのです。

田中 ですよ。

東宮 もちろん、一つの私たちがよくするお茶席は、別世界と離れて、普段の忙しい生活を忘れて、ひと時ゆったりとした気持ちで過ごしてリラックスしましょうというのが一つの目的なので。お茶室の中に入ると、それはそれですごくくつろいだいい気持ちにはなりますね。そういう難しい設定がどうのこうのということなしに、ただお茶を一杯いただくのです。利休さんは、釜一つあれば茶の湯は成り立つと。道具をいろいろ凝るのは間違いだとさえおっしゃっているの、あまりわびの境地というか、あまり道具に凝ってしまってもいけないという教えもあるのです。だから、本当にあり合わせの道

具でしばらく静かな時間を持つということです。それがあつて意味で、この今の忙しい世の中の時間の中では一つの贅沢な時間だと思います。

田中 なるほど。

木村 何か生活の中で悩みとかおありで、お茶室に入ったつてそれを忘れられるということですか。

東宮 そうですね。要するに、お茶室に入つて、普段のことを忘れてというのがあれなのですが。

木村 どうして忘れられるのでしょうか。

東宮 集中するということ。お点前は、例えば今私がやっていたら、そのときはそのことしか考えない。ほかのことは考えない。それが多分禪の修行につながるということなのでしょうけれど。座禅するときには、本当にひたすら座つて何も考えない無心な気持ちになるということですが、お茶は、例えばお茶を点てながらそういう気持ちになるということ、ほかのことは全部忘れられるというか。お茶杓を例えばふいているときは、やはりこのようにするというあれがありますよね。そのとおりにきちんとやるつて、そういうことしか考えません。お茶筌通しをしているときは、無心になってやります。何か考えていると、やはり乱れるのです。だから、多分それで道ということなのだと思うのです。柔道でも剣道でもやはり無心になってやらないと、「すきあり」ということになりますよね。それと同じようなことが多分お茶でもあるのだと思うので、今やっていることに集中するということか。

亭主は亭主の分を守る、お客さまはお客さまの分を守る。だから、扇子を置いてあいさつするのは、自分は自分の分を守つて相手のところに飛び出していかないというのがあるそうなのです。一つの座を盛り上げていくというそれぞれの役目を果たして、お正客はお正客で、お話というのですが、一番最後のお客さまはその人の仕事というのがあるのです。それがちゃんとできて、亭主は亭主の役割を果たします。亭主を手伝う人を半東というのですが、半東は半東の役割を果たして、一つの会がうまく盛り上がつていきます。誰かが間違つると、うまくいきま

せん。

例えばお茶の準備にしても、火が起きるまでに大体何分かかるとか、お湯が沸くのに何分かかるといふのがありますよね。もちろん季節によつて違ふのです。では、お客さまがいらつして席に入る席入というのですが、席入が何時と決めたら、それまでに全部逆算して用意していくのです。お客さまもやはり何時に集合、席入を何時と決めると、あまり早く来たら亭主は慌てるし、かといつて遅れてこられたら炭は火が起きてしまつて流れてしまふ、それからお湯も冷めます。お料理なんかも出す場合には、やはりその時間というのはすごく大事なのです。そういう暗黙の了解というのですが、みんながうまくそれをちゃんと守るからお茶事という一応正式のお茶がうまく流れて、誰かが一人自分勝手なことをするとうまくできないのです。せつかくお料理を作つていても、お客さまが遅れて来られたら冷めてしまひますし、味なんかも。お菓子なんかも、きちんとしたお客さまは「何時に召し上がりませうか」といふのです。それで「いついつに食べませう」といふつたら、それに合せて、やはり一番おいしい時間というのがあるのですね。

田中 お菓子も。

東宮 お菓子にしてもです。だから、なかなかそこまでできないのですけれども、一応昨日のお菓子を出したらおいしくないわけですし。「何時に食べる」といふつと、お菓子屋さんはそのつもりで用意してくれているのです。だから、時間を守るというのはすごく大事です。それでのろのろしていたら、うまくできないです。だから、それを修行で、決められたことを決められた時間に。例えば、これは煙草盆なのですが、薄茶のときは出すのです。これが出ていると、リラックスしてくださいということになるそうだそうです。濃茶のときは出ていないのです。濃茶は厳肅にするのです。それで、濃茶というのはいあまりしゃべらないで静かにやるのです。その濃茶が終わつると、一応お香が出てきたりお座布団が出てきたり、リラックスしてくださいということ、薄茶のときは和やかに話を楽しみます。だから、一つのお茶事の流れの中で、

お濃茶は厳肅に静かにして、薄茶のところではリラックスして楽しくということですよ。

今日はやっていませんが、炭を入れる炭点前というのがあって、お客さまの前で炭を入れるのです。それで、炭を入れてお湯が沸く間に、お客さまは食事をするのです。そのお食事やはり決まったコースになっているのですが、それがうまくいっていないと、せっかく沸いたお湯が濃茶に間に合わなくて冷めてしまったりとか、早すぎると沸いていないというのがあります。結構、だから面白いのですが。そういう意味ではゲームみたいで。きちんとしたことができるかどうか。

田中 そういうアレンジメントですね。

東宮 そうです。対時間に間に合うようにということで、そういう意味では亭主は水屋と荷物を置いたところのことを全部するのは、やはりチームワークがうまくないとできません。お客さまの方では、お客さまのやり方が間違っているとうまく流れないとか、お茶事のときに返っているべき器が返っていないと亭主も困るとかいろいろルールがあって、そういう楽しみもあります。ただ、一番の楽しみは静かな時間を持つということなので、あまり道具に凝ってしまってもいけないのですが、またそれも楽しいですけど。

田中 お客さんたちも来ていただいてお話を。

東宮 どうぞ、入ってください。

久美 はい。

田中 もうお茶の修行というのは結構長くやっていますか。

純子 どれくらいになるのでしょうか。だいぶなるかと思えます。

東宮 ベテランです。

純子 ベテランではないです。年数だけはたってきました。

田中 なるほど。お茶というのは。お茶を習われるというのは、何か資格ではないですが、何か教授とかありますよね。そういうものをやはりこう。

東宮 順番に。

田中 順番に目指すみたいな。

東宮 入門からだんだん上がっていきまして。

田中 なるほど、やるわけですかね。

純子 でも、よく分からないのですが、きっと最初の方というのはあまり先のことは考えないで、取りあえずお茶をやってみようというのが。私の場合も。

東宮 大抵の方は、お茶の飲み方ぐらい覚えていないと、という動機で始められる方が多いですね。それで、お茶の飲み方が分かったらそれでいいとおっしゃる方もいるけれども、だんだんのめり込んでくる方が多いですね。面白いですから。

田中 なるほど。すると、最終的には、よく分からないのですが、そういうのというのはお茶の先生を目指すということになるのですか。そういう方もいらっしゃるし、そうではない方も。

東宮 いろいろな方がいますけれどもね。

純子 お茶の先生というのは、きっと、自分で目指してなれるものではないと思うのですよね。

田中 そうですか。

東宮 どうですかね。でも、10年もやっていたら、そこそこまで許状はもらえますよね。そこから楽しさが分かってきます。

田中 そうなのですか。どのようにやっていますか、入門当時とだんだんベテランの境地に達してきたときの楽しみの違いというのはどういう感じなのでしょう。

久美 最初はやはり手順を追うだけなのです。覚えようと思うのですけれど、だんだんその手順の動作の意味が分かってきて、そうするとお道具の拝見する楽しさも分かってきて、お茶室に入ったときの掛け軸とかお花とか、そういうことを拝見する楽しさも理由も分かってきて。そうすると、多分どんどんどんどんきりがなくらい奥が深くなります。

田中 なるほど。さっきやっていますか「このお茶碗はどこののでしょうか」とかそのような会話で、「今日、これを出してくださったのだ」というようなことですか。

久美 お稽古でも先生はお菓子を選んで、毎

回違うものを用意してくださったりとか、お釜も月によって替えてくださったりとか、季節感をきちんと私たちに分かるようにして下さるので、それもまた楽しみです。

田中 なるほど。そういうのは何ですか。先生からお客さんというかお弟子さんへの一種のプレゼントというか、今日はこういうことをして差し上げようという一種の接待、ホスピタリティのようなものですか。

東宮 ホスピタリティというか、生徒が喜ぶだろうなと思ってこちらは準備するのです。季節季節に合わせた道具をなるべく使うと、生徒さんも季節感も分かるだろうし、道具を見る目もだんだん育ってくるだろうし、お稽古とはいいながらそうやってやっているうちに、その取り合わせを自分たちが覚えていくというものもあるし。3月だったら、例えばおひな祭りの趣向にすると。おひな祭りは知っていますが、例えば重陽の節句とか、9月にやる重陽なんて知らないという人もたくさんいますので、そういういわゆる節句とか日本の昔からの伝統行事というものをどこかに取り合わせの中に出すと、生徒もだんだんそれが分かってきます。初めは「重陽とは何ですか」と言っていたのが。

私もお稽古し始めのころは、9月なのになぜ菊のお菓子が出てくるのだろうと。旧暦ですからずれているのですが、重陽というのは菊の節句ですよ。そうすると、菊のものが出てきます。本当に今から思えば恥ずかしいです。何も分からないでお茶会に行ったら、9月に菊がいっぱい出てくるのです。なぜ今こんなにたくさん菊が出てくるのだろうと思って、だんだん分かってきたら「ああ重陽の節句なのだ」と。そういういわゆる日本の昔からの伝統行事やお祭りとかいろいろなものがありますよね。そういうものもだんだんいつの間にか。

いつの間にかというのがいいですね。学校の教科書みたいにカリキュラムが組んであって、何月何日は何を教えてというのではなくて、最初はお菓子がおいしくてお茶を飲む、それだけでいいのです。それが楽しみでお菓子が楽しみで始めていいのです。特に若い人なんかは。それが1年もたつうちに、何かいろいろなことを

覚えてきた。気が付いたら結構いろいろなことを覚えたよねという感じが、一番お稽古としてはいいのではないかと思うのです。だから、楽しみながら半分遊んでいるようであるけれど、いつの間にかいろいろなことを覚えている。

よく言われるのですが、お茶席に入ると、まず床の間に行って、床の間の前でお軸を見て、お花を見て。お軸もなるべく違ったものを掛けるようにしていますから、こういう季節なのとか誰によって書かれたものなのとか。禅語からきていることが多いですから、その禅語の意味ですよ。それと季節と、お花を見て「ああもうこういう季節なのだ」とか自然の美しさに気が付く。大げさな言い方をすると、日本のよさが分かる、日本人でよかったねというか。お花でも本当に季節感、季節なのだという感じ。

久美 ツバキにもすごいたくさん種類があって、それはお茶をするまでよく分からなかったのですが、いろいろなツバキが本当にたくさん種類があって、それを床の間に飾ってくださると、やはりいろいろと楽しみで勉強させてもらいます。

東宮 特に冬の季節は野草を生けますので、道端に咲いている何でも花が床の間に生けてあると、「え。あの花がこんなに」というか、本当に。「茶席の花は足で生ける」とよく言うのですが、本当にその辺に咲いている花を持ってきてバツと床の間に生けてうまく生けられたら、霧吹きで露を打って。そうすると、自然の美しさに気付くというか。

それで、そのときは別に何もあれなのですが、それが繰り返して何年かたってくると、いつの間にか花の名前も覚えているし禅語も覚えているし、いろいろなことを覚えているなという。お点前の順序だけではなくてね。そうやって1年、2年、何年とたっているうちに、動作、振る舞い、所作も上手になってきて。

田中 純子さんと久美さんも、やっているときに何かそういう驚きとか、何か気付きというか、何かいろいろご経験があると思うのです。何かそういうエピソードをお話いただけると。亭主がこういうことを、先生がこういうことを

